

〔書評〕

山口仲美著

『平安文学の文体の研究』

渡 辺 実

表現学会から出ている「表現研究」という雑誌に、「自著紹介」と呼ぶ欄がある。その第四〇号に、本書の著者である山口仲美さん自身による、かなり詳しい自著紹介がのっている。自分のことを内幕まで知っているのは自分以外に無いのだから、こういう自著紹介がある以上、他人が他著を批評する意味はないようなものだ。だが一方、自分の声だと思っただけで聞いている声色は、他人の耳に達している本当の（？）自分の声とは一致しないし、自分の顔と信じて見ている鏡の像は、他人の目が見る本当の（？）顔の左右を対称移動したものに当る、という事実もある。他人の頭と心に本書がどう映るかを述べることは、どちらが本当であるかは別として、無意味に限ったものでもないかも知れぬ。もっともどちらが本当により近いかに関して、声と顔の場合は他人の側が圧倒的に形勢有利なのに、頭と心の場合は他人の側の歩が悪いことは、覚悟してかからねばならないであろう。

本書は著者が今までに発表した、平安文学の文体に関する諸論文を、一書に集めた論文集である。中で発表の最も早いのは、昭和十四年八月九月に雑誌「国文学」に連載された「比喩の表現論的性格」と『文体論』への応用」であり、発表の最も新しいのは、昭和五十

八年十月「国語と国文学」掲載の「源氏物語の象徴詞——その独自の用法——」であって、ほぼ十五年にわたる著者の研究の集計が本書である、と言えるであろう。これらの既発表論文は、その扱う主題によって類にくくって配列され、通読の便がはかられている。このように発表の時期の異なるものを一書に再録するにあたっての「若干の加筆修正」が、ここでも当然ほどこざれているが、大幅な改稿の事はないように見られる。論文集は著書ではない、と信じている私は、そのことが不満のだが、生産力旺盛と期待される年代にまで論文集作りが普通となつて来た現況を見れば、これはむしろ私が頑なで古くさいのに違いない。

本書の巻頭に置かれた「序論」一編は、本書の中の唯一の書きおろしで、短いものだが著者自身が自分の仕事をどう把握しているかを示し、全体へのイントロダクションを果す位置にある。したがってその内容は、最初にふれた著者の自著紹介と重なる所が多いが、その中で著者は、種々ある文体論の簡単なスケッチをからませつつ、自分の文体研究を「語学的文体論」と自己規定して「文学的文体論」と袂をわかし、その扱う領域を「類別的文体研究」と「個別の文体研究」とにまたがらせる。著者が自ら「平安文学の文体の研

究」と命名する著述の中で、文学的文体論の行き方を避けて語学的文体論の立場を貫こうとする理由は、作品の言語事実、著者の言葉を使って言えば「形態」に、発言の根拠を置こうとする所に存する。綿密な調査にもとづく客観的な観察記述と、それにしっかりと立脚して発言する姿勢とを、あくまで守ろうとする態度のあらわれである。また「文体」という、語学の扱う対象としてはこの上なく個性的なものへのアプローチであるべき研究の中に、「類別的文体」の研究が含まれているのは、「本書のとり扱う平安時代においては現代よりも文章の類型が厳然と存在していた」という判断による。ただし著者が最も魅力を抱くのが「個別の文体」であるらしいことは、

本書では、第一部「文体研究への展望」と題し、文章体や文学ジャンルの類型的特性をとりあつた論考を、類別的研究として、個別の文体研究への導入部とした。

という言葉の示す通りである。

こうして本書は、まず類別的研究に属する論文を集めて「導入部」とし、それをふまえる形で個別的研究に属する論文を次第する、という構成がとられた。既発表諸論文をこうした流れにくくる柱の名称を転記すれば、

第一部 文体研究への展望

第二部 比喩と文体

第三部 象徴詞と文体

第四部 作品の性格と文体的特性

の如くである。第二部以下が個別的研究に当ることは言うまでもないが、その三つの柱は鼎立してはいない。個別の文体研究

の従来の方法を批判的に紹介して、著者自ら、

……本書は、従来の方法を反省し、次の二つの方法によって、個別の文体研究を展開してみることにした。

第一は、個性のあらわれそうな表現形式を一つ選び出し、その表現の性格の解明を通して、個々の作品に切り込んで行く方法である。……そうした表現形式として、本書では、一つには比喩表現を、一つには象徴詞をとりあげた。

第二の方法は、その作品において頻出したり、あるいは奇妙な出現の仕方をしたりする表現形式に注目して、そこから作品の個性や成立過程に迫って行く方法である。

と述べる通り、第二部と第三部とが同類として第四部に対する、という形になっている。もし序破急に本書を配するなら、第二部第三部が破に相当し、量的にも約三〇〇ページに達して、約五三〇ページの全体のほぼ六割を占めている。

右に引いた方法論の中で気になることが一つある。それは「個性のあらわれそうな表現形式」という言い方と、それに該当するものとして比喩表現と象徴詞とが選ばれていることである。著者は、書き下ろしの「序論」に見られる如く、方法というものについて極めて自覚的かつ反省的であって、その点まことに敬服させられるが、例えば比喩に注目する理由を、「リスのようにすばしい男」という表現に即して説明するのに、

この場合、表現対象は、「すばしい男」である。この対象を「ねずみのように」と言っても良い……が、この……表現主体は……「リスのように」というとらえ方をするのである。この様に、比喩には、表現主体が対象を如何に見ているかと言う事、

即ち、表現主体の発想法とも言うべきものが明示されているのである。

とあるあたりは、少くとも私を説得しない。右の引用文を含むのは、先にふれた、本書再録諸論文の中で最も発表時期の早いもので、著者のこういう初期の論文によってとかく言うことは、私の好みには合わないけれども、素材となつてゐる男を言語主体が「すばしい」という言葉で対象化した時、そこにすでに個性的な把握があるのでないか、同じ人物を「ぬけ目のない」という言葉や、「敏捷な」という言葉で対象化するのは、違った把握があるはずで、その違いは、「リスのように」と「ねずみのように」との違いと、同質のものでないかという気がする。象徴詞の場合も同様であろう。

だから著者の言う「個性のあらわれそうな表現形式」とは、語彙論、文法論、修辞学など、様々の言語研究で立てられる様々の言語的類型の中で、文体論の追求しようとする表現主体の個性に、最も関係が深いと期待されるもの、というような意味であろう。例えば語彙論的に、「親族語彙」「飲食語彙」「象徴詞類」その他様々の類を立てることが出来るが、作品中の親族語彙に作者の個性が反映するとは一般に期待できないのに対して、象徴詞についてはその期待が大きい、といった意味と思われる。だがもしそうだとすれば、それは著者が、

「予め設定された項目に従つて一律に調査し、文章特性を探つて行くと、結局、文章をいくつかの類型に分類することになつて行つてしまふ。」

と批判して避けようとした、「予め設定された項目」による文体研究に、方法として通じてしまふのではないかと疑われる。もとよ

り著者の研究が、「文章をいくつかの類型に分類する」ことに行きつてしまふようなことはなく、個別研究の線は厳として守られてゐる。にもかかわらず、個別研究の方法としては、やはり当の作品に特徴的な表現形式の発見に頼る、第四部の如き方法を主とすべきでないか、と思うのである。第四部の方法について著者自ら次のように言う。

あらかじめ一般的に設定されている調査項目に依存することをやめ、個々の作品に即して、その作品の特性を示すと思われる表現形式を、そのたびに発見しながら追求して行く方法をとるのである。

まことに文体研究は、一つ一つの作品に特徴的な言語形式を「そのたびに発見」することに賭けるしかない。それは「一見迂遠に見えるけれど、個別的文体研究の、最も効果的な方法」である、と私も著者と共に信ずるものである。

著者が方法に関して自己に厳しいから、敢て右のような疑問を提出したのだが、本書の真骨頂は方法論などにあるのではない。それはむしろ、まことに行き届いた調査と、それをふまえた説得力のある解釈に存する。著者は本書の「あとがき」の中で、そしてかの自著紹介の中でも、自分の論文はこのようでありたいと思いつつ書いた、という、論文心得の三条を語る。それは、

一つ、直観では予想できなかったような事柄を、分析の結果明らかにしえたという新鮮さのある論文。

二つ、直観的な印象と調査結果とが、くい違いをみせるという意外性のある論文。

三つ、多数の人が漠然と抱いていた印象を、分析の結果、うま

い具合に実証できたという説得力に富む論文。

というもので、三条とも言語事実の調査を立脚の根本に持つ立派な心得と言うべきであろう。そして本書所収の諸論文が、右の三条のいずれかに該当しているのが、一段と立派に思われる。

いま、静かに読み返してみると、そうした意気込みが、どこまで実現されているのか甚だ心許ない。

という「あとがき」の言葉は、文字通りの謙辞にすぎない。本書所収の論文一つ一つに即して、それを指摘したい思いだが、あまりに長くなるにきまっているから、第二部第四章の「今昔物語集の比較表現」の一篇だけを探り上げて、著者の行き方を辿ることにする。

この論文は、今昔物語集の文章に対して従来「生硬」「技巧的」という全くあい反する直観的印象が持たれて来た上に、その両面を有する「玉石混淆」の作とする評もある事実から出発し、今昔物語の比較表現を調査分析することによって、右の三通りの直観には、それぞれなりの理由があることを明らかにする。立論を支えているのは今昔物語全巻にわたる直観の調査で、これを今昔全巻中で一回しか現われない「非典型的」な直観と、二回以上現れる「典型的」な直観とに別ち、これらを出典資料の表現とつき合わせて、出典の語句をそのまま受けついでたもの、出典の語句を改変しているもの（これを更に出典語句の影響を残すものと、すっかり別語句に全改したものと別ける）、及び出典に無く今昔撰者が独自に加えたものに仕別けることによって、出典語句を受けついでた比較と、出典語句の影響を残す比較とが、非典型的な比較に相当し、出典語句を全改した比較と、撰者が独自に加えた比較とが、典型的な比較に相当する、という事実が明らかにされる。出典の文章表現をそのまま受け

つぐ文章と、撰者自身から出る文章との、このような二重構造は、今昔物語に対して従来それほど明確に解明されていず、著者の調査と分析結果とは、発表当時まことに新鮮な印象を与えたものであった。この論文が先の論文心得第一条、「直観では予想できなかったような事柄を、分析の結果明らかにしたという新鮮さのある論文」にあたるという意味のことを、著者自身その自著紹介の中で、ひかえ目ながら述べておられるのは、当然と言ってよいであろう。と同時に、例えば今昔を「生硬」と見た直観が、それは撰者自身から出た文章に関して妥当な直観であった、と「実証」されることになる点では、論文心得第三条を満足するものだし、逆にそれは出典の語句をそのまま受けつぐ文章に関しては不当な直観であった、とその「くい違い」が明らかにされることになる点では、論文心得第二条を満足するものでもあって、多分は著者の快心作だったのではないかと推定される。そしてこの成功を支えたのが、今昔全巻にわたる丹念で精力的な調査であったことは、明らかだと思われる。

同様のこと、すなわち論文心得三条のどれかの、行き届いた調査に支えられての実現は、本書の随所に見出される。それを一つ一つ、なるほどと首肯しつつ読む中に、言語事実に対する著者の解釈に、二通りの方向があるらしいことに気付く。その一つは、口誦性とか文字言語とか、或いは和文系とか訓読系とかの、個性のレベルとは異なるところへ持って行くこととする解釈であり、他の一つは、表現する作者の個性のレベルへ持って行くこととする解釈である。例えば第四部第三章「平中物語の文体と成立事情」で、「ぞ……ける」の係り結びや、接続助詞「ば」その他の調査を通して、歌物語の一つに数えられる平中が、伊勢、大和といった他の歌物語とは著しく

異なる文章事実を持つことを指摘し、その差のよって来る所以を、伊勢、大和は口誦文芸として成立しかつ伝承の途上で文章の洗練を受けたのに対して、平中は先行歌物語の口誦性を模しつつ当初から文字文芸として成立した、という所に求める運びなどは、作者の個性とは異なるレベルの、言わば類型に近いレベルで解釈しようとするものであろう。一方例えば第三部第三章「源氏物語の象徴詞」で、源氏物語では象徴詞が、登場人物の内面や品格を描くのに使われるという、他の作品には見られぬ用い方があることを指摘して、そこに作者紫式部に特有の、人物造型の意志のあり方を見ようとするくだりなどは、作者の個性のレベルに解釈を持って行こうとするものであろう。しかもそこでは、物語の「よみ」との関連で象徴詞を論ずることが試みられているのである。調査の周到は一貫して変らないのだが、解釈のリーチが、類型的なレベルへ向けられて留る場合と、個性的なレベルに達して作品の「よみ」に及ぼうとする場合とが、混在するのである。これは著者がその文体研究を、類別的文体研究と個別的文体研究とにまたがらせたことの反映のように見えて、実はそうでない。著者の言う類別的研究は、第一部の諸論文の行き方を指すのだが、右に挙げた二つの論文は、第四部と第三部に属し、行き方としては共に、著者の言う個別的研究に属するものだからである。

恐らくこの解釈の二種の距離は、著者の研究が進んだ距離なのではないか。いま類型レベルの解釈の例とした平中の論文は、もと昭和五十年九月の発表にかかり、個性レベルの解釈の例とした源氏の論文は、最初に紹介したように、昭和五十八年十月の発表で最も新しい。その差八年の間に、著者の興味の焦点が移動しようとしてい

るように私には思われる。国語学から一斉に文体論的発言がなされはじめた頃、語学的文体論の多くがそうであったように、著者の文体論も、当初は類型のレベルで解釈を下すことで、十分な存在理由を果したのであろう。だが平安文学に惹かれる著者が、個性への興味を抑えられなくなるのは当然である。著者が、類別的研究を「導入部」として個別的研究へ進む、という構成で本書を編んだのと符合するごとく、著者自身が類型的研究の成果を積み上げて来た末に、それらを言わば導入部として、個性的解釈へ進もうとしているのだと思われる。その著者の歩みは、扱う主題別に内部編成された本書の構成にそのまま対応するはずは無く、類型的研究と個性的解釈とが入り混って読者の前に現れる、という結果になっているのである。巻尾には、新しい方から二つ目の「源氏物語の表現——並列形容語の分析から——」（昭和五十七年八月、「国語と国文学」所掲）と、早い方から二つ目の「今昔物語集の文体に関する一考察——『事无限シ』をめぐって——」（昭和四十四年十二月、「国語学」所掲）とが、あい接して置かれているが、この二篇のそれぞれで示される解釈は明らかにレベルが異なるのに、多分は対象作品の年代に従ってであろう、旧解釈の今昔論が、新解釈の源氏論の後をうける形で、本書のしんがりの位置を占め、通読の便を考えての配慮が、私のような読み方をする読者とまどわせる逆効果の因となっている。

ここに於て私の思いは、冒頭に述べた本作りのことに帰って行く。私は、このテーマをこれ以上自分の手もとであたためてもそれに見合うだけの発展は望めない、という所まで来た時が、著書刊行の時である、と思い込んで来た。だからそのテーマに関わる旧稿は、解体の上で再生されるか、さもなくば捨てられるのが原則であ

る、と思い込んで来た。論文集は著書でないとする思い込みは、ここからの自然な帰結であった。だが到着なり転換なりの時期にさしかかったと実感した時、今までの自分を振り返り、それにけじめをつける形での論文集の刊行が、あっていいのではないかという気がする。そういう論文集の刊行は、言わば新しい自分の出発を期するという意味があるのだから、むしろそれは生産力が旺盛であることの証しのようなものではないか。本書が論文集であることへの不満を最初に述べたが、そして論文集であるが故のマイナスがあることも今しがた述べた通りだが、それらはすべて著者の近き将来の生産によって帳消しとなるべきなのであろう。本書の著者が、徹底して周到な調査の姿勢を崩すことなく保ちつつ、かつそこに掘り起される言語事実に対して、真に文章の個性や作者の個性に届く解釈をほどこすことを一段と強め、そこから作品の「よみ」にかかわる発言を重ねることで、語学的文体論が文学の秘密に肉迫するための、先駆的役割を果たされることが、大いに期待される所以である。

(昭和五十九年二月二十日発行 明治書院刊 A5判 五七六頁 八八〇〇円)

— 京都大学教授 —

(昭和六十年五月十六日受理)